

インドネシア—日本

新しいパートナーシップシンポジウム

主催



経済産業省
Ministry of Economy, Trade and Industry

後援

JETRO
Jakarta



ジェトロ・ジャカルタ事務所 ジャカルタ ジャパン クラブ

在インドネシア
日本国大使館次席公使

進藤 雄介氏

ホテル・ボロブドゥール ジャカルタで開かれたシンポでは在インドネシア日本国大使館の進藤雄介次席公使、インドネシア技術評価応用庁(BPPT)のタタン・アフマッド・タウフィック副長官が開会あいさつをした。

進藤公使は今年で国交樹立57年目を迎えたインドネシアは日本にとって重要なパートナーだとした上で、「国際協力銀行(JBIC)の調査によると、中期的に有望と考える事業展開としてインドネシアが1位に選ばれた」と述べ、日本企業によるインドネシアへの関心が引き続き高いと指摘した。

実際に13年の外国からインドネシアへの直接投資額約2兆3300億円のうち、日本は約17%と1位を占める。一方、インドネシアの日本語学習者が87万人と

世界2位。元日本人留学生在が設立したダルマブルサダ大学があるなど、日本という国や文化を理解した国民が多く、「他に例のない両国の強い友好関係を感じる」と述べた。

タウフィック副長官も「2期連続でBPPT長官が元日本留学者。半分以上の職員が日本留学経験者だ」と、日本での経験、日本との関係がBPPTの財産となっていると指摘する。

「インドネシアは若年者の人口が増える。日本には科学技術がある。この両国の利点を生かしながらお互いの利益を生み出す新たな協力関係の枠組みを築いていかなければならない」と呼びかけ、ジョコ大統領が5年以内に国内で複数新設する計画を打ち出している科学技術中核拠点(テクノセンター)建設などで日本の協力を求めた。

インドネシア技術評価
応用庁副長官

タタン・アフマッド・
タウフィック氏

開会あいさつ



シンポジウムの締めを飾ったレセプションでは冒頭、在インドネシア日本国大使館の池谷蔵参事官は、「両国の関係を一つのために皆さん一人一人の心が大切だと改めて感じた」とあいさつ。

レセプション

が随所で見られた。来賓としてあいさつしたインドネシア地方代表議会(DPRD)第二委員会委員長のバリン・ドワンガン・プルバ議員は、「日伊の架け橋となりたい。(首都)ジャカルタがあるジャワ島だけでなくスマトラ島などインドネシア全土でこうした交流会を開きたいと呼びかけた。

在インドネシア日本国大使館参事官 池谷蔵氏

業家のバスメレ河野力樹氏が自らの経歴を紹介した。河野氏はアラブ系インドネシア人。父と日本人の母の間に生ま

を経て、現在はインドネシアのテレビ番組で日本文化を紹介するなど日伊の架け橋として活躍している。「皆さんが持つストーリーや思いを集めて融合し、共有することが未来を創ることに不可欠だ」と訴えた。

じゃかるたお掃除クラブのデラント・バククリ代表はジャカルタの街角でゴミ拾い活動を展開する同クラブの設立経緯を説明した。

ジャカルタではゴミ捨てられたゴミに至る所で落ちていたインドネシア人がゴミ拾い活

ストーリーや思い集めて融合／ゴミ拾い活動 社会の良い手本に



①満員のシンポジウム会場
②来場者の多くはインドネシア人
③会場から真剣な質問(経済分科会)



95%で満足しない人材育成を

インドネシアと日本が共に成長してゆくための課題と取り組み

(パネリスト)

P.T. シンター・ランス・インドネシア 社長 太田誠一氏
(株) プリチストン 中央研究所研究第4部長 渡辺訓江氏
ダルマブルサダ大学 学長 オロアン P. シアハアン氏
三菱電機オートモーティブインドネシア(株) ゼネラルマネジャー トビ・シンギ氏
(司会)
ジェトロ プラットフォームコーディネーター 松井和久氏

経済分科会

第2部の経済分科会では「インドネシアと日本が共に成長していくための課題」と取り組みをテーマに、インドネシア側がバネリスカッションした中小企業振興などのインドネシア研究に30年以上携わる日本貿易振興機構(ジェトロ)プラットフォームコーディネーターの松井和久氏を進行役に、経済を通じて日伊の協力関係について熱心な議論が交わされた。

結果、「インドネシア人は95%をまねることができたら満足してしまう傾向がある。完全に100%のものを作ろうという意識改革が必要」と問題提起した。



パネリスカッションでは日伊双方から2人ずつ参加した。インドネシア側の参加者は基調講演に続き、京都大学で治金工学を学び、現在は元日本留学生在が設立したダルマブルサダ大学で学長を務めるオロアン・シアハアン氏。三菱電機のインドネシア子会社三菱電機オートモーティブインドネシアでゼネラルマネジャーを務めるトビ・シンギ氏。日本側は、76年に技術者として来伊し、00年から表面処理を担う現地企業シンター・ランス・インドネシアで社長の熱心な議論が交わされた。



第2部の政府分科会では日伊の政府関係者17名が集いそれぞれの関係者らが出席した。日本側からは在インドネシアの政府機関の幹部らが出席した。司会は経済産業省通商政策局アジア大洋州課永井春信参事官が務めた。

「人と人」「心と心」をつなぐ場へ

基調講演

ガルダ・インドネシア航空会社 CEO
アリフ・
ウィボウォ氏

在メダン日本国総領事
濱田 雄二氏

ダルマブルサダ大学 学長
オロアン P. シアハアン氏



「潜在力」に期待

技術・人への投資力

民衆と地方分権化の進展に貢献する人材育成面での支援。上総堀など日本の伝統技術を駆使した淡水井戸の建設、有機栽培技術などの協力を推奨し、「日本の技術を投資してインドネシアの環境改善、都市空間の有効利用を進めれば両国に明るい未来がある」と訴えた。

京都大学で治金工学を学んだ経験を持つシアハアン学長も「日伊関係は非常に特別なもので、特別な潜在能力がある」と指摘する。その上でダルマブルサダ大が元日本留学生在が立ち上げた非常にユニークな大学で日伊関係に重要な役割を果たしており、「世界情勢が複雑化する中、いかに人々との関係を築いて相互理解を深めていくことに尽きる」と述べた。

その意味で50年以上続いてきた日本留學生などを通じた日伊の人的交流が今後の関係強化の力を握るとする。「心と心の関係を続けるためにも、個人レベルの関係だけでなく同窓会や友好協会など組織レベルで友好関係を築くことが、両国の友好強化に不可欠とした。

トビ氏も日本とインドネシアの下請け受注方式の違いを原因に挙げる。下請け企業を持つ日系企業と違い、インドネシアは「一番安い料金を掲げ、元日本留學生が設立したダルマブルサダ大学で学長を務めるオロアン・シアハアン氏。三菱電機のインドネシア子会社三菱電機オートモーティブインドネシアでゼネラルマネジャーを務めるトビ・シンギ氏。日本側は、76年に技術者として来伊し、00年から表面処理を担う現地企業シンター・ランス・インドネシアで社長の熱心な議論が交わされた。

結果、「インドネシア人は95%をまねることができたら満足してしまう傾向がある。完全に100%のものを作ろうという意識改革が必要」と問題提起した。